

日英語話者の視点構図と言語表現

濱田 英人

0. はじめに

言語が情報伝達的手段としてばかりでなく、人間の概念形成に重要な役割を果たしていることや、その言語話者の慣習化された事態認識の仕方が言語表現に影響を与えることは良く知られている。濱田(2011)では日英語話者の事態認識の違いについて考察し、中村(2004, 2009)のIモード、Dモードをそれぞれ「場面内視点」「場面外視点」という用語で言い換え、日英語の多くの言語事実の分析から中村の理論の妥当性を論じた。

小稿は濱田(2011)での議論を更に押し進め、日英語での概念的自律性・依存性の違いや「能動／受動」の意識の違いが「場面内視点」「場面外視点」という事態認識の違いから自然に説明できることを示そうとするものである。

1. 概念化者の事態認識：場面内視点と場面外視点

濱田(2011)では日本語話者は基本的に「場面内視点」で事態と捉えるのに対して英語話者は「場面外視点」で事態を捉える傾向から、その「視点」と言語表現の関係を次の(A), (B)のようにまとめ、それぞれの認知プロセスの違いを図1のように示した。

(A) 日本語話者の出来事の捉え方（「場面内視点」）と言語表現：

日本語話者は出来事の中に自分をおいて直接インタラクションすることで出来事を捉え、何かをとっかかり（トピック）にして話しをする。つまり、

出来事を参照点構造で把握する。(参照点・ターゲット型認知)

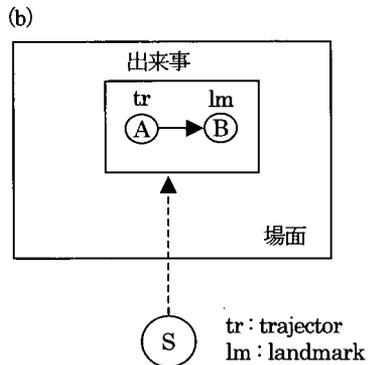
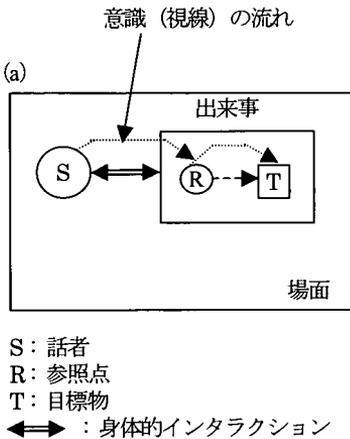
(B) 英語話者の出来事の捉え方(「場面外視点」と言語表現:

英語話者は場面の外に視点を置いて出来事を捉え、その場面の中の誰(または何)に視点を置いて「AはBだ(A is B)」あるいは「AがBを~する(A do B)」と表現する。つまり、出来事をトラジェクター/ランドマーク認識する。(tr/lm型認知)

(濱田 2011: 73)

<日本語話者の出来事の認識の仕方>

<英語話者の出来事の認識の仕方>



(ibid.: 75)

Figure 1

また、その言語化がどのような認知プロセスに基づくのかに関して次のように述べた。

(1) 日英語話者の視点と認知プロセス

(A) 日本語話者は参照点構造で出来事を捉える。そのため、Salience principle の原理に従って出来事を言語化する。

(B) 英語話者はトラジェクター／ランドマークで出来事を捉える。そのため Figure/Ground のメカニズムに従って出来事を言語化する。

(ibid.: 76)

(2) Saliency principle:

human > non-human, whole > part, concrete > abstract, visible > invisible

(Langacker 1993: 30)

(3) Figure/Groundの要因

- a. 小さいものが Figure／大きなものが Ground となりやすい。
- b. 動的な存在が Figure／静的な存在が Ground となりやすい。
- c. モノ的な存在が Figure／場所・空間的な存在が Ground になりやすい。
- d. 有生物が Figure／無生物が Ground になりやすい。
- e. 具体的なものが Figure／抽象的なものが Ground になりやすい。

(山梨 2004: 160)

そしてこのように日本語話者が「場面内視点」で事態を捉え、その事態の参与者を参照点・ターゲット型認知で把握し言語化する傾向が強いのに対して、英語話者が「場面外視点」で事態を捉え、その事態の参与者をトラジェクター・ランドマーク型認知で把握し言語化するという傾向が強いということから、両言語の表現の違いを自然に説明できることを主張した。具体的な事例をいくつか示せば、たとえば、次の (4a-b) の日本語と英語の表現の違いはまさに日本語話者の「参照点・ターゲット型認知」と英語話者の「tr/lm 型認知」でそれぞれ何を目立って認識するかということを反映している。つまり、日本語話者は事態を参照点構造で把握するので、「全体と部分」の関係から全体の方が参照点になり易いという (2) の「目立ちの原理」に従って、「場面」（ここでは駅）をまず言語化し、それを参照点としてその場面の中の「行為や状態、または出来事」をターゲットとして表現するのである。それに対して、英語話者は tr/lm 型認知で出来事を捉えるので Figure/Ground という認知操作によって出来事の中で一番目立って認識されている人やモノをトラジェクターとして認識してそ

れを主語として言語化し、次の目立ち度の高い人やモノをランドマークとして認識し、それを目的語として言語化するのである。もっと言えば、このような tr/lm 型認知では場面は背景として目立ち度がそれほど高くなく、そのため斜格で（この場合には in the station）表現されるのである。

- (4) a. 駅で花子に会ったよ。
b. I met Hanako in the station.

また、このことに関して更に例を付け加えれば、日英語の住所の書き方もまさにこれと並行的である。

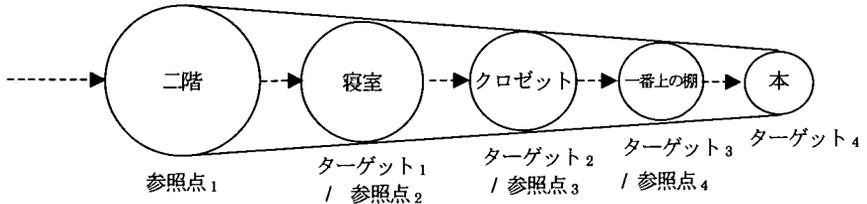
- (5) a. 北海道札幌市豊平区西岡12-25, 305号室
b. #302, 12-25, Nishioka, Toyohira-ku, Sapporo, Hokkaido.

つまり、日本語では全体である外枠から中心に向かって言語化されるが、英語では場面の中で一番目立って認識されているモノ（ここでは部屋）をまず言語化し、それを特定するための要素を付け加えるという構造となる。更に、モノの在りかを説明するような場合にもこれと同じプロセスであり、次の(6)に示されるように日本語では参照点・ターゲットという認知プロセスを繰り返しながら目標物を特定するという認知操作を経るのに対して、英語では一番中心のモノをトラジェクターとして認識し、それを特定するための要素（修飾語句）を付加する構造である。

- (6) a. 二階の寝室のクロゼットの一番上の棚にある本
b. the book on the top shelf in the closet in the bedroom upstairs.

つまり、日本語話者の場合には図2に示されるように何かを参照点としてターゲットが認識されるが、次の段階ではそのターゲットが今度は参照点となって、

更にその次のターゲットが認識されるという認知の仕方である。

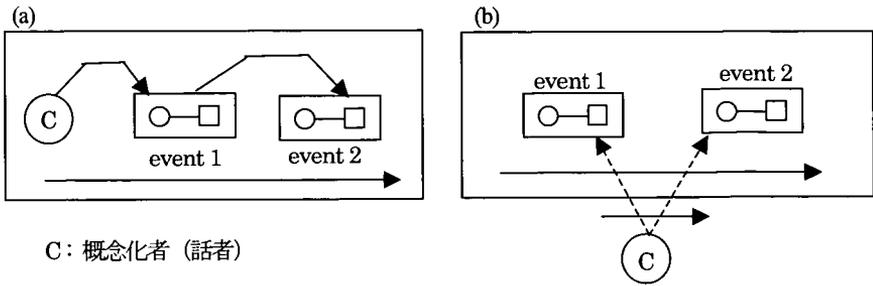


(ibid.: 77)

Figure 2

また、日本語話者が「参照点・ターゲット型認知」を基本とし、英語話者が「tr/m型認知」を基本とするということは「主節と従属節」の言語化からも裏付けられる。つまり、日本語話者は出来事を「場面内視点」で捉え、図3(a)のように参照点構造で出来事の連鎖を捉えるため、参照点となる出来事は必然的にターゲットとなる出来事の前に言語化されことになるのである。それに対して、英語話者のように「場面外視点」で出来事を捉えるということは、図3(b)のように2つの出来事が視界の中にあり両者を「論理的関係」で捉えることになるので、機能主義的な視点を考慮しなければ、どちらが先に言語化されても問題はないということになるわけである。更に言えば、日本語のような参照点からターゲットへという認知プロセスでは(7d)のような逆行代名詞化が不可能であることも自然に説明がつくのである。

- (7) a. ステファニーは家に戻ると、クリストファーに電話した。
 b. When Stephanie came back home, she called Christopher.
 c. Stephanie called Christopher when she came back home.
 d. When she came back home, Stephanie called Christopher. (逆行代名詞)



(ibid.: 78)

Figure 3

2. 概念化者の事態解釈と概念的自律性と依存性

濱田(2011)では日本語話者と英語話者では出来事の概念的自律性・依存性の感覚が異なっていることを主張した。ここで概念的自律性・依存性とはそのものとして独立的に存在することができるかどうかということであり、たとえば、book, desk などは何かの助けがなければ存在しないというものではないので概念的に自律的であり、それに対して make, buy などは「誰が」と「何を」ということがなければその行為が完結しないので概念的に依存的であると言える。このことを踏まえ、濱田(2011)では出来事を想起する場合に日本語話者と英語話者では何を概念的に自律的と認識するかの違いがあることを次の言語事実を例に取り上げて論じた。

(8) a. 「(機械が)壊れちゃった。」

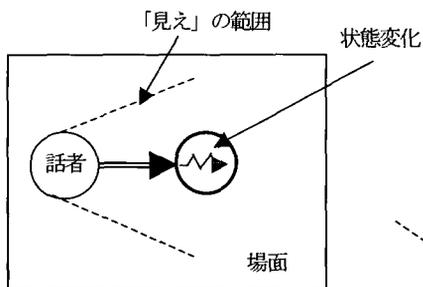
b. I broke the machine.



Figure 4

つまり、英語話者は「場面外視点」で出来事を捉えるので図5 (b) に示されるようにその出来事全体が視界に入っており、その中の参加者を tr/lm 認知するわけであるから、このような認識のモードでは出来事を「2つの参加者の関係」として捉えるということになるのである。そのため行為の主体が話者自身であってもそれを客体化して‘I’と言語化するわけである。それに対して日本語話者は「場面内視点」で出来事を捉えるので、図5 (a) のように概念主体の「見え」として認識されるのは「機械が壊れた」という状態の変化であり、行為者としての話者は存在するが、自分で自分を見るということではできないので、この「見え」の範囲内にはないわけですから言語化もされないということである。

(a) 日本語話者の事態認識



(b) 英語話者の事態認識

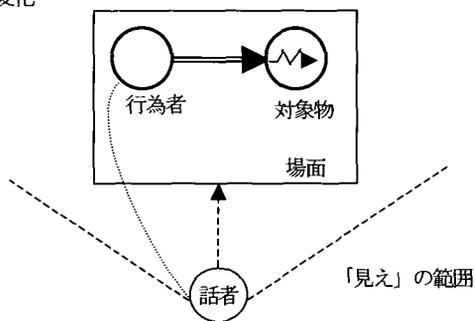


Figure 5

そして日本語話者の場合にはこのような認知プロセスでの出来事の把握の仕方が慣習化しており、そのために日本語話者は「手を洗う」と聞くと、その行為を特に「誰が」ということを意識することなく、次の図6のように思い浮かべることができるのである。



Figure 6

このようなわけで、日本語話者は「映画を観る」、「絵を描く」「車を買う」というように行為のみでも想起することが比較的容易であり、従って、このことから日本語の場合には図7に示されるように「手を洗う」というような行為自体の概念的自律性が高いといえる。

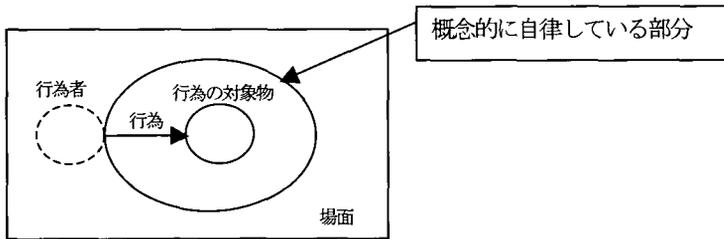


Figure 7

そしてこのように日本語話者の場合には「見え」の範囲にあるのは「行為」とその「対象」であり、このコア・プロセスの概念的自律性が高いことは日本語では次の(9)に示されるように行為としての「動詞+対象」が名詞化される場合が多いことから支持が得られる。

- (9) a. 豆まき (豆をまく)
 b. 靴磨き (靴を磨く)
 c. 草刈り (草を刈る)
 d. くじ引き (くじを引く)

- e. 値引き (値を引く)
- f. 栓抜き (栓を抜く)
- g. 目隠し (目をかくす)
- h. ゴミ捨て (ゴミを捨てる)
- j. 水汲み (水を汲む)
- k. 魚釣り (魚を釣る)
- l. 水まき (水をまく)

つまり、(9a-l) の名詞化表現はその基底にある行為である「動作+対象」で意味が完結しているように感じられるからこそ見られる現象であると言える。そしてここでの主張である概念化者の「見え」と出来事把握の仕方の慣習化による「行為+対象」の概念的自律性は池上(2011)の次の主張とも一致するといえる。

- (10) 〈話者〉が採るスタンスは、その際に〈話者〉によって発せられる特定の文のさまざまなレベルでの構造的特徴として具現化される、従って、もしある言語の〈話者〉によって好んで採られる〈事態把握〉のスタンスがあり、それが繰り返し実践されるならば、それは結果的にその言語の〈(話者によって)好まれる言い回し〉(‘fashion of speaking’: Whorf (1956 [1939]: 158, 159) と呼びうるような形で、多かれ少なかれ慣習化したものとして扱われうるようになるだろう。

(池上 2011: 59)

それに対して英語話者が「場面外視点」で出来事を捉えるということは Langacker の「典型的事態のモデル」に関する次の主張からも明らかである。

- (9) The archetypal **agent** is a person who volitionally initiates physical activity resulting, through physical contact, in the transfer of energy to an external

object. Its polar opposite is an archetypal **patient**, an inanimate object that absorbs the energy transmitted via externally initiated physical contact and thereby undergoes an internal change of state. [...] By combining certain of the models described above, we obtain the complex conceptualization sketched in Fig. 7.2, which might be termed the **canonical event model**. The stage model contributes the notion of an event occurring within a setting and a viewer (V) observing it from an external vantage point. Inherited from the billiard-ball model is the minimal conception of an action chain, in which one discrete object transmits energy to another through forceful physical contact. Moreover, the action-chain head is characterized as an agent, and its tail as a patient that undergoes a resultant change of state. In sum, the canonical event model represents **the normal observation of a prototypical action**.

(Langacker 1991: 285-286)

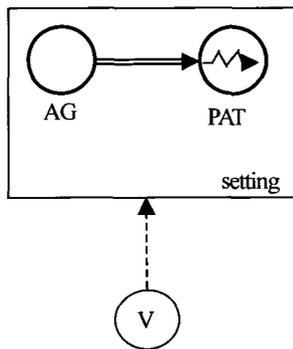


Figure 8 : Canonical Event Model (Fig. 7.2.)

つまり、この「典型的事態のモデル」は本稿での「場面外視点」での事態解釈であり、英語の場合には「行為者 (Agent)」と「被行為者 (Patient)」があって初めて事態が概念的に自律的として認識されるのである。

そして、このような認識の違いは次の (10) に示される「中間態 (Middle

Constructions)」に関する認識の違いにも現れているように思われる。

- (10) a. This knife cuts well.
 b. This car drives easily.
 (11) a. このナイフはよく切れる。
 b. この車は運転しやすい。

つまり、英語話者の場合には「場面外視点」で出来事を捉え、論理的な視点から全体 (Maximal scope (MS)) には動作主が存在するものとして認識し、それが背景化され注意の焦点である Immediate scope (IS) にある thematic relation の部分が言語化されているということになるが、日本語話者の場合には「場面内視点」で出来事を捉え、概念化者 (話者) あるいはそれを一般化した存在としての動作主 (Agent) は「見え」の範囲にないので言語化されず、このような見方が慣習化されているので、むしろ(11a-b)は「ナイフ」や「車」の属性表現として認識するのである。¹

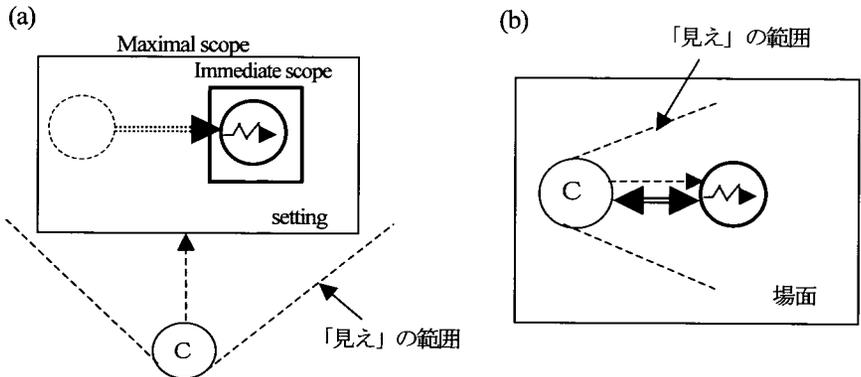


Figure 9

¹ 本多(2003, 2005)は英語の中間構文について、動作主の存在を含意するがこれは中間構文がアフォーダンスの表現であることの必然的な帰結であり、明示されない中間構文の知覚者は話者または話者を含めた一般の人と解釈されるが、この話者から一般の人への拡張は観察点の公共性の現れであると述べている。

4. 場面内視点・場面外視点から見えてくる日英語話者の世界の切り取り方

4.1. 視点の自由度

これまで述べてきた英語話者と日本語話者の事態認識の違い、つまり、「場面外視点」と「場面内視点」から見えてくる視点構図の違いは次のことも自然に説明することを可能にするという意味でも妥当性を有している。つまり、英語話者は基本的に「場面外視点」で事態を認識するので、話者の「見え」の範囲としては事態全体がその認知フレーム内にあるため、視点の転換が比較的自由であるのに対して、日本語話者の場合には「場面内視点」で事態を認識するため、当然のこととしてその認知フレームは概念主体（話者）からの「見え」の範囲に限定されることになるので、視点の転換ができ難い。このことは次のような身近な例からも明らかである。

(12) A: Your breakfast is ready.

B: Thanks. I'm coming.

(13) A: 朝ごはんできたよ。

B: ありがとう。今行く。

(12B)で‘I'm coming.’となるのは話者が聴き手の側に視点を転換し、その視点から客体視された自分の行為を述べるので、その行為は‘come’となるわけであるが、日本語話者の場合には自分自身は「見え」の範囲になく、その「見え」の範囲にあるのは聞き手であるため、そこへの移動は「行く」でしかないわけである。そしてこのようなことから同様に聞き手の卒業式に行くことを伝えるような場面でも、日本語の場合には話者の視点で述べられるが、英語では(15a-b)のように話者視点、聞き手視点の両方が可能なのである。

(14) 卒業式に行くよ。

(15) a. I'm going to your graduation.

b. I'm coming to your graduation.

4.2. 日本語話者の認知プロセスと「能動・受動」の意識

これまで繰り返し述べてきたように日本語話者は「場面内視点」で事態を捉えるので、言語化の対象は認知主体（話者）の知覚的・認識的な「見え」の範囲に限られている。従って、この視点構図からの事態把握は英語話者の「場面外視点」での事態把握と全く異なっている。そこでこの両言語話者の視点構図の違いから「態」の問題を考えてみると、英語話者の場合は「場面外視点」から事態全体を視界内に捉え、(16b)のようにその参加者の中の被動作主を焦点化し *tr* として認識するとその事態が受動文で表現されることになる。

(16) a. John broke the vase.

b. The vase was broken by John.

それに対して日本語話者の場合には「場面内視点」で事態を捉え、それを「参照点・ターゲット型認知」で把握するので、英語のような受動文はでき難い。具体的に言えば、日本語話者は「ジョンが花瓶を割った」という事態を自分との関わりで認識し、次の(17)のように表現する（つまり、被害受身で表現する）のがむしろ一般的である。

(17) ジョンに花瓶を割られた。

また、これと関係することとして、次の(18)の対比によって示されるように「嬉しい」「退屈する」「驚く」のような表現は英語では受動的な表現として言語化されることも注目に値する。

<日本語話者> <英語話者>

- | | |
|-------------|----------------|
| (18) a. 嬉しい | I am pleased |
| b. 退屈する | I am bored |
| c. 驚く | I am surprised |

これは日本語話者の場合には図10 (a) のように「場面内視点」で対象（出来事）と直接インタラクションし、その対象からの刺激に対して自然に抱く感情が「嬉しい」「退屈する」「驚く」ということであるのに対して、英語話者は図10 (b) のように「場面外視点」で自分自身と対象を含めた全体を視野に入れて話をするので、認知主体（話者）は「刺激の受け手」として認識されるため受動態で表現されることになるのである。

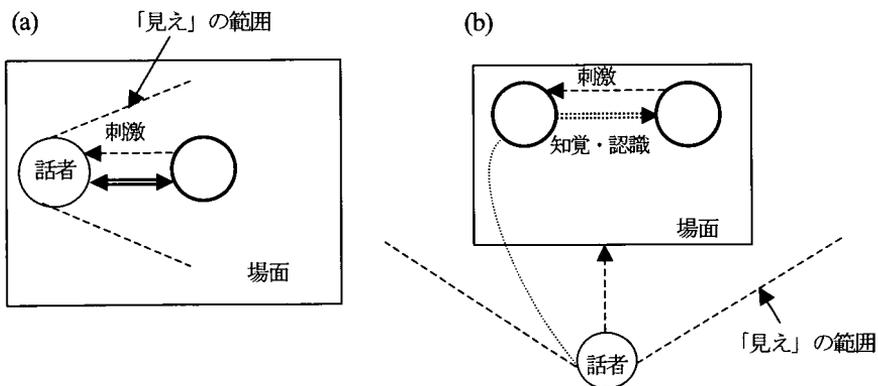


Figure 10

このことに関して更に付け加えれば、いわゆる「主観性述語」の問題も同様に説明することが可能である。つまり、「嬉しい」「悲しい」のような主観性述語は日本語では話者の感情の表現であり、そのため (19b) のように話者以外を主語にすることはできず、話者以外が主語となる場合には (19c) のように「そうだ、ようだ、らしい」等の表現が必要である。しかし、(20a-b) に示される

ように英語にはこのような制約はない。

(19) a. (私は) 嬉しい。

b* 田中さんは嬉しい。

c. 田中さんは嬉しそうだ／嬉しいようだ／嬉しいらしい。

(20) a. I am happy.

b. Mr. Tanaka is happy.

このことに関して池上(2011)では(21)のように非常に興味深い論考がなされているが、これも「場面内視点」「場面外視点」という観点から原理的に説明することが可能である。

(21) 人間の気持ちを表すとされる形容詞の意味がその内面的な側面に焦点が当たるようなやり方で捉えられたり、外面的な側面に焦点が当たるようなやり方で捉えられたりするという揺らぎが認められることがある。言うまでもなく、〈主観的把握〉好みの話者であれば前者の方に、〈客観的把握〉好みの話者であれば後者の方に、それぞれ傾くであろうと予測することができる。—中略— 例えば、英語の *kind* は ‘saying or doing things that show that you care about other people and want to help them or make them happy’ (LDOCE⁴) といった定義からも読み取れる通り、外に現れる振舞いに焦点が当てられるのに対し、日本語の「親切」は「人情が厚いこと、思いやりがあり、行き届いて丁寧なこと。」(『角川新国語辞典』) という定義にも見られる通り、明らかに内面的な気持ちの方に重点が置かれている。

(池上 2011: 61)

つまり、日本語の内的状態述語に対応する英語の形容詞が「外に現れる振舞い」に焦点が当てられるのは、英語話者の採る「場面外視点」では事態の参与

者を客体視して、論理的に記述することになるので、必然的に客観的な情報である「振舞い」が形容されることになるのである。では、なぜ日本語の場合には内的状態述語の主体が話者に限定されてしまうのだろうか。結論的にはこのことは日本語の受動文の性質を考え合わせることで自然に説明がつく。つまり、日本語では受動文は池上(2011)も(22)のように述べているように、本来的には特定の事態が話者にとってどうであるのかを述べる表現形式であり、いわば話者の内面の心的状態を言語化したものであるといえる。具体的にはその事態を話者が「不利益」あるいは「不快」と感じたときの表現である。

- (22) まず広義の文法的な側面に注目してみれば、日本語のさまざまな文法的手段の機能には、〈事態〉そのものがどうなっているのか、というよりも（あるいは、それと並んで）〈話者〉との関わりを示唆する意味合いが多く含まれていることにすぐ気づく。例えば、日本語の〈受身〉が（欧米系の言語での〈受動態〉が基本的に〈能動態〉で捉えた場合とは作用の方向が逆であることを表すように思えるのとは違って）典型的には出来事が話者にとって〈不利益〉であるという意味合いを伴いうるということ（類似の用法が東南アジアの諸言語にも認められることは、よく知られている通り）、…

(ibid.: 60)

従って、日本語では以下に示されるように事態そのものは自動詞文でも他動詞文でもよく、図11 (a-b) に示されるように、その事態が図中の破線矢印で示されるように刺激となり話者にある感情（ここでは不愉快）を引き起こさせるということなのがある。

<自動詞文の受動文>

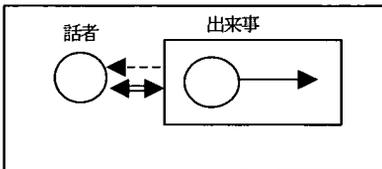
- (23) a. 雨に降られた。
b. 友達に來られた。

- c. 赤ちゃんに泣かれた。
- d. 待ち合わせしていたのに、ビルに先に行かれた。

<他動詞文の受動文>

- (24) a. スリに財布を取られた。
- b. 花子にコンピューターを壊された。

(a) 自動詞文の被害受け身



(b) 他動詞文の被害受け身

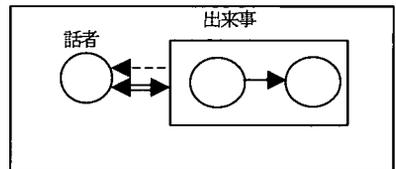


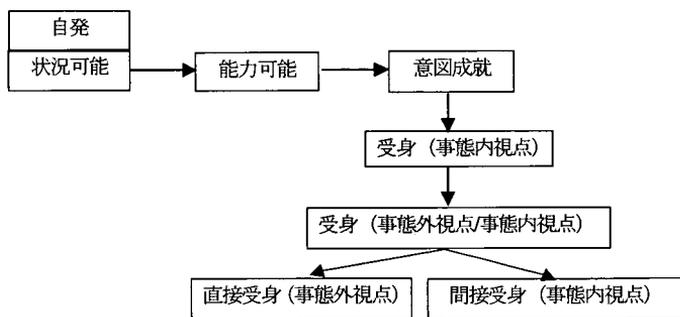
Figure 11

つまり、ある事態や対象が刺激となり、それに対する話者の価値判断、感情の表現という意味では日本語の主観性述語と迷惑受身は共通性をもっており、両者は共に話者の内面の表現であるということである。

そして更に言えば、日本語の「ラレル」構文の多義性もこのことと関係している。というのは「場面内視点」で事態を捉え、その事態を参照点・ターゲット型認知で把握するということは事態を「能動」対「受動」という視点では捉えていないということであり、ここに「ラレル」構文の意味拡張の本質があるのである。² この構文に関して町田(2011)は本来的には「自発」を表す日本語の「ラレル」構文の意味拡張を認知文法の視点から詳細に論じ、図12のようにその意味拡張を示しているが、そもそもなぜこのような意味拡張が可能となっ

² ここでの議論は尾上(2003)からも支持がえられる。尾上は「ラレル文」の事態をあえて個体の運動（動作や変化）として語らず、場における事態全体の出来、生起として語るという事態認識の仕方を表す文として特徴付けこれを「出来文」と呼んでいる。そして、意味そのものとしては必ずしも「出来文」把握を必要としない<受身><可能><尊敬>などの意味を、日本語では「事態全体の生起」スキーマを適用することによって言語的に実現するのでであると主張している。

たのかという、結論的にはそこには概念主体と対象が主客未分であること、また、事態を能動／受動の対立として見ていないという「場面内視点」特有の認識が反映されているわけである。



(町田 2011: 175)

Figure 12

具体的に言えば、次の (25a) は事態に対する概念化者の自然発生的な感情であり、(25b) は決して意図的 (volitional) な能力ではなく、いわば許容できるという意味での能力である。また、(25c) は概念化者が自分の経験知で対象を判断しているのであり、(25d) は概念化者の直接経験から得られた成果であり、(25e) は「犬が (私の) 顔をなめる」という概念化者が直接経験した事態に対する話者の感情 (不快感) を表す言語表現である。従って、このように考えると「ラレル」という表現は図13に示されるように本来的には概念化者が「場面内視点」で対象と直接インタラクションすることによって、その対象が刺激となり、その結果生じた感情を含めた価値判断を表す表現形式であるということが出来る。

(25) a. あの失敗が悔やまれる。(自発)

(事態に対する認知主体の自発的な感情)

b. ジョンは刺身が食べられる。（能力）

（認知主体の直接経験による主語の能力）

c. このキノコは食べられる。（可能）

（認知主体の経験知からの判断による対象の属性）

d. 出された料理を全部食べられた。（意図成就）（認知主体の直接経験）

e. 犬に顔をなめられた。（被害受身）（認知主体の直接経験）

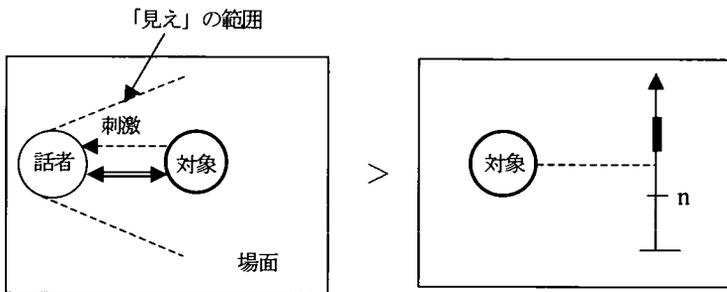


Figure 13

そしてこのように考えることで「ラレル」が敬語表現で使用されることも自然に説明がつく。つまり、次の(26)を例に取れば、敬語用法は「先生が来る」ということを価値判断の対象として認識し、そのことに対する話者の価値判断がなされた結果が「ラレル」という表現になって言語化され、慣習化されたものと考えることができる。³

³ 次の(ia)と(ib)の違いは明らかに「が」格と「に」格の違いであり、「に」格の場合に「迷惑受身」と解釈されるのは、この与格が「利害関係」を表すことに起因していると考えられる。

(i) a. 先生が来られた。（尊敬）

b. 先生に来られた。（迷惑）

つまり、「太郎は花子に本をあげた」における「花子に」は利害が及ぶ対象を表し、(ib)の「先生に」は概念主体に「被害」を与える主体という違いがあるが、「利害関係」を表している点では共通しているわけである。また、坪井(2003: 53)は二格名詞句は主語との間の心理・感情面での force-dynamic な働きかけの側面を前景化すると述べている。

(26) 先生が来られた。(敬語表現)

ここで要点を繰り返すと、上の議論から「場面内視点」で事態を参照点・ターゲット型認知で捉えている場合には「能動／受動」という認識ができ難いということであり、「能動対受動」として捉える感覚は「場面外視点」で事態の2人の参加者のどちらかを α として認識するかということに起因しているということである。また、日本語話者が「場面内視点」で事態を捉えて表現することは、中村(2004, 2009)が主張するように認知主体と事態は「主体と客体」という関係ではなく、いわゆる「主客未分」の視点構図であり、このことが言語化に大きな影響を与える結果となる。「ラレル」構文を分析的に見れば、(25a), (25d), (25e) は概念主体に関することであり、一方 (25b), (25c) は対象に関することであるが、そのどちらにも「ラレル」と言えるのは、「主客未分」だからであり、このことは対象を複数の形容詞を用いて記述する場合、英語とは違って日本語ではその語順にあまり制約がないこととも共通性をもっている。つまり、英語では「主体」の評価と「客体」の属性は明確に区別されるために、(27a-c) に示されるようにその言語化では常に主体の評価が対象の属性に先行して言語化されるが、(28a-c) のように日本語ではそのような制約がないのは、主体と対象が「主客未分」であるために、主体の評価と対象の属性が截然と区別され難いからである。

- (27) a. She bought a beautiful antique French doll.
 b. *She bought a French beautiful antique doll.
 c. *She bought a French antique beautiful doll.
- (28) a. 彼女は美しい古風なフランスの人形を買った。
 b. 彼女はフランスの美しい古風な人形を買った。
 c. 彼女はフランスの古風で美しい人形を買った。

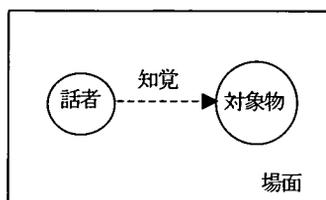


Figure 14

結論を言えば、「ラレル」構文は概念化者が「場面内視点」で対象と直接インタラクションすることによって、その対象が刺激となり、その結果生じた価値判断あるいはそれに基づく感情を表す表現形式というスキーマ的意味を有し、概念主体と対象が「主容未分」であり截然と区別し難いために「自発」「能力」「可能」「意図成就」「被害受身」「敬語表現」という意味拡張が可能となったと考えられる。

この点で二枝 (2009) が「ラレル」構文を中動態と位置付けているのは非常に興味深い。態 (voice) という文法範疇は通常能動態と受動態に区分され、それぞれ能動構文と受動構文で言語化されるが、能動文と受動文のそれぞれが意味の上でも能動、あるいは受動を表しているかというところではないことはよく知られている。たとえば、(29a-c) は形式的には受動文であるが「受身」の意味を表しているわけではないし、(30a-c) の再帰構文では形式的には能動文であるが、能動の意味ではない。

- (29) a. I was surprised at the news.
 b. I was bored with his lecture.
 c. I was excited at the news.
- (30) a. I enjoyed myself
 b. I washed myself.

そこで二枝 (2009) は「態 (voice)」とは本来「主語が動詞の表す事態に対してい

かなる関係をもつかを表示するもの」であるということから、こうした言語現象を「中動態 (middle voice)」を考慮に入れることで自然に説明できると述べている。そして、中動態の本質は本来他動詞の参加者の始点と終点の区別が不可能か必要ない場合に生じる自動詞化であり、そのため中動態の主語は動作の始点と終点の両方の意味をもつと主張している。具体的には英語の中動態を表す形式として再帰構文と中間構文を取り上げ、次の (31a-c) の再帰構文は形式的には他動詞構文であるが、主語と目的語の指示対象は同一であり、従って action chain の始点と終点が同じであるわけで、tr から動作が出ている点では能動態であるが、目的語の参加者にエネルギーが及ぶという点からは受動態であるということはこの構文は能動態と受動態の両方の性質をもっていると述べている。また、(32a-c) の中間構文も形式的には能動文であるが、action chain の head は特定化されておらず、エネルギーの到達する参加者が tr として言語化されている点で受動態に似ていると主張している。

- (31) a. The newspaper unfolded itself in the wind.
 b. The bag opened itself.
 c. An idea formed itself in my mind.
- (32) a. The door opened only with great difficulty.
 b. A good tent puts up in about two minutes.
 c. This ice cream scoops put vey easy.

(二枝 2009: 110)

そこでこの問題を「場面内視点」「場面外視点」という観点から捉え直して言えば、元来、日本語話者は「場面内視点」で事態や対象物を認識し、それを参照点・ターゲット型認知するので、その事態を能動的、あるいは受動的という感覚では捉えておらず、それを言語化した表現はまさに中動態であると言える。それに対して、英語話者は「場面外視点」で事態を捉えるので、それを「能動／受動」の対立で捉えやすく、従って、「中動態」を表現しようとする図15(a)、

15(b)に示されるように再帰構文や中間構文の形を用いることで「能動対受動」の対立を中和するしかないわけである。

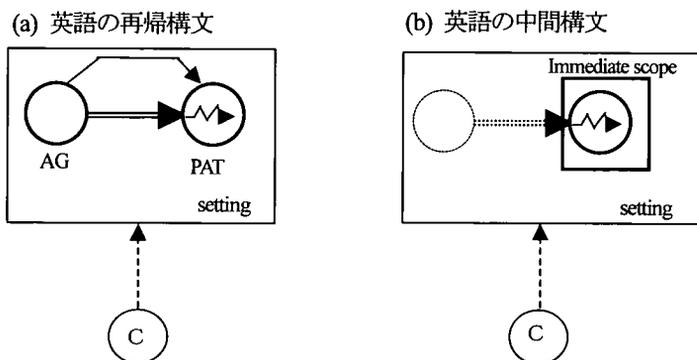


Figure 15

5. まとめ

小稿では濱田(2011)での議論を更に押し進め、日英語での概念的自律性・依存性の違いや「能動／受動」の意識の違いが「場面内視点」「場面外視点」という事態認識の違いから自然に説明できること述べた。この違いは日英語話者のそれぞれが世界をどのように認識するのか、あるいは世界がどのように見えているかということを反映するものであり、それぞれの言語話者のこの世界の切り取り方の違いが言語表現に明確に現れているのである。本研究では日本語と英語を対照的に考察したが、他の言語も分析の対象とすることで、人間の認知操作と言語の関係をより明確に理解することが可能であると考え、この問題は今後の課題として考えたい。

参考文献

- 濱田英人 (2011) 「言語と認知－日英語話者の出来事認識の違いと言語表現－」『函館英文学』第50号, 65-99. 函館英文学会.
- 本多 啓 (2003) 「英語の中間構文」『言語』Vol. 32, 76-81. 東京: 大修館.
- 本田 啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論－生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.
- Ikegami, Yoshihiko (1991) “‘DO-language’ and ‘BECOME-language’: Two Contrasting Types of Linguistic Representation.” In Ikegami, Y. (ed), *The Empire of Signs: Semiotic Essay on Japanese Culture*, 285-326. John Benjamins.
- 池上嘉彦 (1991) 『<英文法>を考える－文法とコミュニケーションの間』筑摩書房.
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』NHKブックス.
- 池上義彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」『主観性と主体性』ひつじ意味論講座 第5巻, 49-67. ひつじ書房.
- Langacker, Ronald. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (1993) “Reference-Point Constructions.” *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 加賀野井 秀一 (2005) 「開かれた日本語」を求めて」月刊『言語』vol. 34, No. 12, 58-65, 大修館書店.
- 町田 章 (2005) 「日本語被害受身の間接性と概念化」『語用論研究』第7号, 45-62, 日本語用論学会.
- 町田 章 (2011) 「日本語のラレル構文の形式と意味－認知文法からのアプローチ－」『意味と形式のはざま』163-177. 英宝社.
- 中村芳久 編 (2004) 『認知文法論Ⅱ』大修館書店.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』353-393, 開拓社.
- 二枝美津子 (2007) 『格と態の認知言語学』世界思想社.
- 二枝美津子 (2009) 「中動態と他動性」『京都教育大学紀要.』No. 114, 105-119.
- 尾上圭介 (2003) 「ラレル文の多義性と主語」『言語』Vol. 32, 34-41. 東京: 大修館.
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京: ひつじ書房.
- 月本 洋 (2008) 『日本人の脳に主語はいらない』講談社.
- 角田太作 (1984) 「能格と対格」『言語』東京: 大修館書店.
- 坪井栄次郎 (2003) 「受影性と他動性」『言語』Vol. 32, 50-55. 東京: 大修館.